

片雪蘭著

『不確実な世界に生きる  
難民——北インド・ダラムサラ  
におけるチベット難民の仲間関係  
と生計戦略の民族誌——』

大阪大学出版会 2020年 300ページ

おがわ小川 さやか

本書は、インドのダラムサラにおけるチベット難民、とくに「サンジョル」と呼ばれる人びとの生の営みを「不確実性」を鍵概念として論じた優れた民族誌である。

難民とはいかなる者か。移動を余儀なくされた者、庇護や支援を必要とする者、迫害や弾圧へのひそかな抵抗を試みる者、自らの境遇や秩序の変更をめざして政治的、文化的な運動を展開する者。難民とは、このような像として研究されてきた。それに対して本書は問う。難民であろうと日々の営みの中心は、誰かとつながりを築いて生計を立てていくことにある。だがその際、世界の不確実さをどれほど強く認識し、不確実性への応答を日々の実践に反映させるかは、それぞれがおかれた状況によって異なる。この観点に立てば、過度に予測不可能な状態におかれた難民とは、不確実性を主題として生を紡ぐ者ではないかと。このような問題意識から本書は、サンジョルたちの不確実性への対峙のしかた、他者との関わり方に立ち現れる彼らの行為主体性を細やかに捉えることで、チベット難民たちの「生の構え」を生き生きと浮かび上がらせた。以下では、本書の概要を明らかにした上で、本書の意義と批評を述べる。

本書は、序章と終章に挟まれた第1章から第5章で構成される。序章ではまず、難民に対する従来研究の捉え方が整理される。難民を能動的か受動的か、自主的か非自主的かという二項対立的な図式の後者の側面において理解し、「定着主義バイアス」のもとで難民の脆弱性を強調してきた主流の研究動向に対し、近年の人類学では難民の主体性に光を当てる研究が増加していることが指摘される。その上で難

民の主体性を強調するだけの視座も問題であるとし、構造的な脆弱性と主体的営為の相互構築的な側面において難民の行為主体性を掘り取る必要性があると主張される。つぎにチベット難民研究が概観され、西洋社会に対して積極的に独立運動や文化表象を行う「迷いのない主体」「強い主体」としてチベット難民を捉える視座から、迷いや葛藤をふくむ個々の営みを注視する視座にシフトしてきたこと、しかし文化の再構築やアイデンティティをめぐる議論に偏重し、難民どうしのつながりや日々の生計など、「難民のままの生」を正面から扱う研究が不足していることが指摘される。最後に不確実性の人類学が取り上げられ、不確実性をリスクと同一視するのではなく、不確実性の肯定的な側面も捉える視座の重要性が提示される。

第1章では、ダラムサラがチベット難民社会の中心地となった歴史的経緯と、同地のチベット難民社会が2つの世界に分離されていることが明らかにされる。ダラムサラは、中国政府の政治的弾圧により、1959年にチベット仏教最高指導者ダライ・ラマ14世が亡命した際、彼とともにインドに移住した者およびそれに続いて移住した数万人の難民によって形成された。1960年代に移住した貴族や官僚、僧侶を主とする難民は「シチャ」と呼ばれる。彼らは同地にチベット亡命政府のほか、チベット文化の保存を目的とする文化教育機関・施設を設立した。シチャに対し、文化大革命が終結した1980年代以降に移住した者たちは「サンジョル」と呼称される。本章では、サンジョルたちが「真のチベット文化」や「伝統」を保存してきた「成功した難民共同体」と自負するシチャたちから、中国化され、チベット人としての純粋性を喪失した者、あるいは近代化されていない者としての扱いを受けていること、またシチャとサンジョルの間には法的地位や社会経済的制約に異なりがあることが明らかにされる。

第2章では、社会的・経済的・政治的に不安定な立場におかれたサンジョルたちの越境から移住後の経験が具体的な事例を通じて検討される。サンジョルの大半を占める若者たちによる越境の背景には、ダライ・ラマへの信仰心、教育に対する希望、文明の中心地であるインドへの憧れの3つの要因がある。彼らはダラムサラを「いいところ」「幸せになれるところ」と信じて10代の頃に単身で越境するが、

移住後に社会的、経済的に疎外され、やがて「歓迎されていない」「行き詰った」と感じるようになる。結果としてサンジョルは、ダラムサラで身につけた教育や技能、人脉を生かして第三国への移住もしくはチベットへの帰還をめざすようになる。本章ではこのようにサンジョルの経験的な世界でダラムサラが「場所」化されたり「非・場所」化されたりする過程を明らかにすることで、「場所」と「非・場所」の概念が連続的なものであることが提示される。

第3章では、仲間たちが絶えず去りゆくダラムサラで、サンジョルたちが構築している社会的ネットワークの諸相が論じられる。まずチベット人たちの間で、ウツァン、カム、アムドという出身地への帰属意識に根差した「地域主義」が構築されてきた背景が説明される。ダラムサラの難民社会ではチベット独立（あるいは自治）という目標に向けてチベット人としてのアイデンティティ創出がめざされているものの、選挙や日々の意志決定において地域主義は再生産されている。サンジョルたちの日々の生活でも同じ出身地の仲間「パウル・チッパ」とくに「ピンジャ」（兄弟姉妹／いとこ）と呼びあう者との親密なネットワークが重視されている。実際、彼らはパウル・ユッパとの関係に応じて職を転々とし、共食や相互支援に時間や金銭を費やすことで、この関係性を構築・維持する。だが、その関係性は安定的なものとはならず、仲間どうしのつきあいにシニカルな心構えをもつ者もいる。濃密な関係性は第三国の移住や帰還によりいずれ終わりを迎え、海外へ行く仲間たちに対しては羨望や嫉妬も向けられる。本章では、このような流動性を織り込んだパウル・チッパとの関係性が、地域主義に根差した所与の規範ではなく、日々の個人の選択の連続で成り立っていることが示される。

第4章では、電子貨幣の贈与交換を事例に、サンジョルたちがいかんにして負債（負い目）を連続させ、関係を構築・維持しているかが論じられる。人類学の贈与交換論では負債が清算されれば、関係は継続しないことが指摘されてきた。逆にいえば、負債の連鎖を引き起こすようにすれば、関係を維持することができる。これが本章の論点である。彼らが利用するのは中国のメッセージング・アプリ「WeChat」と電子貨幣「クマル」である。中国国内に口座をもたないサンジョルの大半は、チベット在住の親戚や

ダラムサラの友人から贈与されることでクマルを入手する。贈与されたクマルは、①中国国内に口座をもつ仲介者に売り、インド・ルピーと交換して生活の足しにすること、および②誰かに贈与したり、仲間うちで回したりすることに使用される。興味深いのは、クマルを贈与された者は与え手に返礼したり感謝の意を示したりする代わりに、WeChat上で贈与交換のやり取りを公開することである。それは与え手と受け手の二者間の負債を清算せず、関係を維持すると同時に、与え手の評判を高め、与え手への第三者からの贈与を促進させたり、受け手による第三者への利他的行為を誘発させたりするしかけとなっている。また多対多の「クマル回し」は、個人の選択で誰かへの贈与の配分を決めるのではなく、WeChatのシステムによる操作にその配分を委ねることで、贈与交換の帳尻を不透明にしつつ、仲間意識を高める遊びとなっている。さらに本章では、チベット仏教の道徳的概念や規範として重視される「ニンジェ」（思いやり）に着目し、自分だけダラムサラで暮らしているという家族に対する負い目や自他の境遇の非対称性からくる負い目を基盤とした本土の人びとへの喜捨、片務的贈与が論じられる。

第5章では、サンジョルたちが偶発的な出来事や状況、偶然手にした情報を資源化することでいかに生計を成り立たせているかがテーマとなる。まず、道を「ぶらぶら」（チャムチャム）することの意味に光が当てられ、仕事を目的的な行為と位置づける近代的な仕事観とは異なる、サンジョルたちの仕事観が提示される。つぎに「ぶらぶらする」を通じて彼らがいかんにして偶発的な契機を資源化し、仕事に転換するかが、代理布施や、ダライ・ラマの加護の力が宿ったモノの売買の事例から詳述される。最後に、近藤 [2009] がナイジェリアの零細企業家の事例を通じて論じた「賭け／逃げ」の実践を手がかりに、サンジョルたちの「生に対する構え」が論じられる。

終章では、各章を総合し、改めて「つながり」と「不確実性」を切り口にサンジョルによる生そのものへの構えが議論される。

以上で概観したとおり、本書はサンジョルたちの生を規定する歴史的、政治的、経済的、社会的な文脈の記述と、それによって生み出される脆弱性や不確実性をやりくりするミクロな日常実践に立ち現れ

る行為主体性の記述を組み合わせ、脆弱性を強調するのでも主体性だけを取り出すのでもない微妙なバランスで、チベット難民の実像に迫った。本書が描き出している、ままたらなさを受け入れ、ままたらなさこそを自らの生活や社会を築く資源とする生き方は、難民に限らず、不安定性や不透明性の高まりに直面する現代の、多様な社会の人びとに多くの示唆を与えるものだろう。評者が専門とするアフリカ研究では、不確実性を客観的な条件と主観的経験の絡みあうものとし、不安を交渉したり人間関係を構築したり未来を想像したりする源としても捉えることを提起する論集が近年、複数出版されている[Cooper and Pratten 2015; Kleist and Thorsen 2017]。本書は、この視座を厚い民族誌的記述に結実させたものであり、不確実性をめぐる人類学への確かな貢献を果たしている。評者は本書を読みながら、アフリカ都市で不安定な暮らしをする人びととの多くの共通性を発見する喜びを感じた。

だが他方で、チベット難民の日常的な営みを評者や近藤が対象とするアフリカの都市住民を含めた、不確実性の高い状況で生きる者たちと共通性をもつものとして開示する本書の試みは、難民あるいはチベット難民の生とはいかなるものかという問いそのものを切り崩してしまう可能性と隣り合わせでもあるように感じた。

たしかにサンジョルは法的な身分として紛れもなく「難民」である。だが狭義の政治難民であったシチャとは違い、本書が対象とする2000年代以降にインドにきた多くのサンジョルの移動動機は、ドライ・ラマへの信仰心を除くと、「より良い人生を切りひらくチャンス」の希求に思われる。評者は10代の若者による困難と危険に満ちた越境が「留学」の一環やインドへの憧れとして実行されることに驚きを感じると同時に、この越境はどこまで他の移住形態と区別し得るものなのかも考えた。たとえば、政治的・経済的・宗教的な動機に光を当てた従来の移民研究に対して、「ライフスタイル移住」という異なる文化圏や生活圏への移動が近年注目されている。長坂[2015]によれば、ライフスタイル移住は、移住せざるを得ない状況からの脱出ではなく、生き方をめぐる個人の主体性や生活の質に対する希望・願望が移住の推進力となる移住形態を指す。先進諸国の中間層が中心の移住形態だが、移住せざるを得

ない状況を主観的経験で捉えれば、閉塞感や将来への不安感もそのひとつであり、それはサンジョルとそれほどかけ離れていないようにも思える。

もちろん難民とそれ以外の移動者をことさらに区別する必要はない。それでもサンジョルの不確実性を織り込んだ実践は、若さゆえ、移動する者ゆえ、インフォーマル経済従事者ゆえ、周縁化された者ゆえ、などでも説明できるのではないかという疑問が時折頭をもたげた。そして豊かな背景説明があるにも関わらず、難民性やチベット難民らしさがあまり前景化しないのは、不確実性という概念をややブラックボックス化し、あらゆる現象や実践を不確実性という切り口で説明しようとしすぎたためではないかとも感じた。

たとえば、序章では仏教の伝統的な現実認識としての「ミタツパ」(無常)に触れ、不確実性に対する構えはそれと響きあうものだと示唆される。非常に興味深い指摘だが、ミタツパがどこまで不確実性の理論的・一般的な説明と重なり得るかという問いはあまり深められない。また第2章ではサンジョルを「ダラムサラの思想を発信する媒介者として育てる」(114ページ)という難民学校の目的が説明されている。だがサンジョルたちの教育や人生設計をめぐる語りでは実利的関心が中心を占めている。とすると「難民共同体」としての文化・思想の拡散やその政治性のゆくえが気になるが、それらには踏み込まれない。教育とサンジョルの不確実な生との関係が主題だからである。同じことは、第3章でもいえる。同郷者とのつながりのなかで生きることと不確実性の対処との関係に光が当てられ、チベット人としてのアイデンティティ創造をめざす難民共同体と地域主義との関係をめぐる問いは背景に退いている。

これらは、従来研究が文化の再構築やアイデンティティに光を当て、「難民のままの生」を看過してきたことへの問題意識から敢えて問うことを犠牲にしたものだと理解している。しかし宗教的な不確実性の理解や文化的・政治的な「難民らしさ」は、彼らの生活から自律した問いなのだろうか。シチャではなくサンジョルを対象にしたから、あるいは本土の家族やホスト社会、支援者たちとの関係よりサンジョル内部の関係に光を当てたから、狭義の難民性を強調しなかったという射程の問題だけでなく、

「不確実性」を軸足にした立論それ自体の限界もあるのではないか。「ままならなさを受け入れ、ままならなさを基盤につながりや社会を築き、いまと未来の可能性を開くこと」は、生きることの中心であっても、すべてではない。その取りこぼされたものの中に、アフリカの都市民や他地域の難民と同じ地平で語れない、サンジョルの「生に対する構え」の固有性が浮かびあがってくるようにも思われた。

とはいえ、これらの評者の意見は、本書の目論見が成功した証左でもあるだろう。本書はまずもって、難民という存在を「他者化」してきた従来研究に対する挑戦として位置づけられる。世界が不確実性に満ち溢れ、永遠に続くと言断できることなど何もないことは、私たちの生でも同じだ。ただ頭で理解できても、それを念頭において生きることは難しい。本書は世界が不確実性であることを認めざるを得ない人びとが築いている世界が想像以上に豊かであり、その実践や論理は私たちにとっても共感し得るものであることを実証してみせた良質な民族誌である。難民研究者にだけでなく、広く読まれることを期待する。

## 文献リスト

### 〈日本語文献〉

近藤英俊 2009. 「偶然化と呪術——ある起業家の賭けと苦境をめぐって——」 落合雄彦編『スピリチュアル・アフリカ——多様な宗教的实践の世界——』 見洋書房.

長坂淳 2015. 「ライフスタイル移住の概念と先行研究の動向——移住研究における理論的動向および日本人移民研究の文脈を通して——」 『国際学研究』 4 (1) (3月) 23-32.

### 〈英語文献〉

Cooper, Elizabeth and David Pratten 2015. *Ethnographies of Uncertainty in Africa*, London: Palgrave Macmillan.

Kleist, Nauja and Dorte Thorsen 2017. *Hope and Uncertainty in Contemporary African Migration*, New York and London: Routledge.

(立命館大学先端総合学術研究科教授)